

耳鼻咽喉科学

1 構 成 員

	平成 24 年 3 月 31 日現在	
教授	1 人	
准教授	1 人	
講師（うち病院籍）	1 人	(1 人)
助教（うち病院籍）	7 人	(4 人)
助手（うち病院籍）	0 人	(0 人)
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	0 人	
医員	2 人	
研修医	0 人	
特任研究員	0 人	
大学院学生（うち他講座から）	1 人	(0 人)
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	2 人	
その他（技術補佐員等）	2 人	
合計	17 人	

2 教員の異動状況

- 峯田 周幸（教授）（H15.5.1～現職）
- 水田 邦博（准教授）（H15.11.1～19.3.31 助教授；19.4.1～現職）
- 細川 誠二（講師）（H16.4.1～19.3.31 助手；19.4.1～22.2.28 助教；22.3.1～現職）
- 大和谷 崇（助教）（H16.3.1～19.3.31 助手；19.4.1～現職）
- 岡村 純（助教）（H21.12.1～現職；23.1.1～休職）
- 三澤 清（助教）（H22.4.1～現職）
- 高橋 吾郎（助教）（H22.10.1～現職）
- 杉山 健一（助教）（H23.1.1～現職）
- 伴 昭宏（診療助教）（H24.1.1～現職）
- 望月 大極（助教）（H24.1.1～現職）

3 研究業績

数字は小数 2 位まで。

	平成 23 年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	29 編	(17 編)
そのインパクトファクターの合計	33.80	
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0 編	
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	

(4) 著書数 (うち邦文のもの)	1 編 (1 編)
(5) 症例報告数 (うち邦文のもの)	7 編 (7 編)
----- そのインパクトファクターの合計	0.00
(6) その他 (レター等)	0 編
----- そのインパクトファクターの合計	0.00

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Misawa K, Imai A, Sugiyama K, Seki A, Mineta H: A right- sided fourth branchial cleft cyst: a case report International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology 75:438-440. 2011
2. Takahashi G, Matsuzaki Z, Okamoto A, Ito E, Matsuoka T, Nakayama T, Masuyama K: A randomized control trail of stepwise treatment with fluticasone propionate nasal spray and fexofenadine hydrochloride tablet for seasonal allergic rhinitis. Allergol Int. 2012
3. Oshima G, Wennerberg J, Yamatodani T, Kjellén E, Mineta H, Johnsson A, Ekblad L: Autocrine epidermal growth factor receptor ligand production and cetuximab response in head and neck squamous cell carcinoma cell lines. J Cancer Res Clin Oncol. 2011
4. Hosokawa S, Okamura J, Takizawa Y, Takahashi G, Hosokawa K, Mineta H: Clinical study of mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma of the head and neck. J Laryngol Otol 126(3); 271-275, 2012.
5. Sasaki Y, Kjellén E, Ekblad L, Wahlberg P, Mineta H, Wennerberg J.: The anti-tumour effect of cisplatin and ifosfamide on xenografted squamous cell carcinoma of the head and neck is schedule-dependent.. Oral Oncol. Jan;48(1):61-6, 2012.
6. Okamura J, Huang Y, Moon D, Brait M, Chang X, Kim MS.: Downregulation of insulin-like growth factor-binding protein 7 in cisplatin-resistant non-small cell lung cancer. Cancer Biol Ther. Feb 1;13(3):148-55, 2012.
7. Imai A, zeitlin BD, Visioli F, Dong Z, Zhang Z, Krishnamurthy S, light E, worden f, Wang S, Nor JE.: Metronomic dosing of BH3 mimetic small molecule yields robust antiangiogenic and antitumor effects. Cancer Res. 2012 Feb 1; 72 (3) : 716-25. Epub 2011 Dec8.
8. Izumi C, Jonathan E. Bird, and Kuni H. Iwasa : Membrane Thickness Sensitivity of Prestin Orthologs: The Evolution of a Piezoelectric Protein Biophysical Journal, 100(11) 2614-2622, 2011
9. Nakanishi H, Ohtsubo M, Iwasaki S, Hotta Y, Usami S, Mizuta K, Mineta H, Minoshima S. Novel *USH2A* mutations in Japanese Usher syndrome type 2 patients: marked differences in the mutation spectrum between the Japanese and other populations. J Hum Genet 56: 484-490, 2011.
10. 瀧澤義徳, 岡村純, 杉山健一, 木村桃子, 峯田周幸, 高木なつ子: 【頭頸部癌における集学的治療】 集学的治療におけるサポートシステム Nutrition supporting team. JOHNS

27(4):615-618,2011.

11. 中西啓、峯田周幸:【顔面・頸部疾患診療における論点】顎下腺唾石症の治療は？顎下腺摘出術の立場から. JOHNS 27(10):1598-1600,2011.
12. 中西啓、水田邦博、大和谷崇、峯田周幸: 当院における耳管開放症例の検討. Otolology Japan 21(2):136-142, 2011.
13. 高橋吾郎、峯田周幸: 鼻噴霧用ステロイドは万能化？. JOHNS 28(1): 51-54, 2012.
14. 高橋吾郎、福原俊一: EBM を支える臨床疫学研究の展望. JOHNS 28(2): 139-142, 2012.
15. 高橋吾郎: 聴覚障害児の言語発達に関わる因子には地域差があるか. 厚生労働省感覚器障害戦略研究「聴覚障害児の療養等により言語能力等の発達を確保する手法の研究」聴覚障害児の日本語言語発達のために～ALADJIN のすすめ～. P196-201, 公益法人日本テクノエイド協会, 東京, 2012.
16. 大和谷崇、水田邦博、中西啓、浜田登、姜洪仁、橋本泰幸、星野知之、峯田周幸: 当科における小児先天性中耳真珠腫手術例の臨床的検討. Otol Jpn 21(3):212-216, 2011.
17. 細川誠二、杉山健一、岡村純、瀧澤義徳、高橋吾郎、細川久美子、三澤清、峯田周幸: 副咽頭間隙腫瘍の手術適応と術式に関する検討. 日耳鼻 114(10): 807-813, 2011.
18. 細川誠二、杉山健一、岡村純、瀧澤義徳、高橋吾郎、三澤清、大和谷崇、峯田周幸: 甲状腺未分化癌の臨床的検討. 頭頸部外科 21(2): 181-184, 2011.
19. 橋本泰幸、高橋吾郎、峯田周幸、友田幸一、山本清二: 鼻内手術用立体内視鏡の臨床応用. 耳鼻咽喉科展望 54(5): 306-309, 2011.
20. 峯田周幸:【私の処方箋】鼻科学領域 鼻前庭炎. JOHNS 27(9):1370, 2011.
21. 峯田周幸:【耳鼻咽喉科領域のウイルス・細菌・真菌感染症治療戦略】頭頸部癌術後の感染症. ENTONI 131:167-172, 2011.
22. 峯田周幸:【小児の耳鼻咽喉科 108 の疑問】顔面・頸部疾患 甲状腺腫にどう対応するか? JOHNS 28(3): 522-524, 2012.
23. 峯田周幸:【頭頸部癌における集学的治療】. JOHNS 27(4): 533-535, 2011.

インパクトファクターの小計 [24.975]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Hosono K, Ishigami C, Takahashi M, Park DH, Hiram Y, Nakanishi H, Ueno S, Yokoi T, Hikoya A, Fujita T, Zhao Y, Nishina S, Shin JP, Kim IT, Yamamoto S, Azuma N, Terasaki H, Sato M, Kondo M, Minoshima S, Hotta Y. Two novel mutations in the EYS gene are possible major causes of autosomal recessive retinitis pigmentosa in the Japanese population. PLoS One 7: e31036, 2012.
2. 堀田喜裕, 中西啓: 網膜色素変性症と Usher 症候群の遺伝子診断. J Eye 28: 907-912, 2011.
3. 齋藤祐介, 早坂孝宏, 尾上健児, 瀧澤義徳, 梶原茂樹, 小川 潔, 瀬藤光利: 高解像度質量顕微鏡を用いた薬物動態の解析. J.Mass Spectrom. Soc. Jpn. 59(4), 79-84, 2011.

インパクトファクターの小計 [4.411]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Yamanishi T, Chikamatsu K, Takahashi G, Endo S, Masuyama K: Immune regulation by CD4+CD25+ regulatory T cells in patients with Japanese cedar pollinosis. Int Arch Allergy Immunol. 156(2):187-95, 2011.
2. Chikamatsu K, Ishii H, Takahashi G, Okamoto A, Moriyama M, Sakakura K, Masuyama K: Resistance to apoptosis-inducing stimuli in CD44+ head and neck squamous cell carcinoma cells. Head Neck. 2011
3. 徳丸裕, 藤井正人, 家根旦有, 濱孝憲, 志賀清人, 峯田周幸, 吉崎智一, 大上研二, 太田一郎, 平野滋, 益田宗幸, 菅澤正, 中島寅彦, 花澤豊行, 崎浜教之, 倉富勇一郎, 丹生健一, 加藤久幸, 今西順久, 杉本太郎, 鈴木真輔, 佐藤雄一郎: 中咽頭癌におけるヒト乳頭腫ウイルスの関与に関する多施設共同研究. 頭頸部癌 37(3):398-404, 2011.

インパクトファクターの小計 [4.417]

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 杉山健一、峯田周幸 : 『診断・治療をマスターする 上咽頭炎』 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 増刊号 83 (5), 2011.

(5) 症例報告

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 中西啓、水田邦博、大和谷崇、高橋吾郎、峯田周幸: MRSA 悪性外耳道炎症例. 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 83(9):669-674,2011.
2. 中西啓、水田邦博、大和谷崇、橋本泰幸、浜田登、峯田周幸: 手術的治療を施行した悪性外耳道炎の2例. 耳鼻咽喉科臨床 104(7) :491-498, 2011.
3. 中西啓、水田邦博、峯田周幸: 症例をどうみるか 中耳手術と耳管開放症. JOHNS 27(5) :807-811, 2011.
4. 細川誠二、杉山健一、岡村純、瀧澤義徳、高橋吾郎、三澤清、大和谷崇、峯田周幸 : 顎下腺原発 salivary duct carcinoma 症例. 頭頸部癌 37(1): 67-72, 2011.
5. 細川誠二、鈴木綾乃、岡村純、細川久美子、竹下有、足守直樹、深水秀一、峯田周幸 : 良性対称性脂肪腫症の2例. 耳喉頭頸 83(6): 433-437, 2011.
6. 細川誠二、高橋吾郎、杉山健一、岡村純、瀧澤義徳、細川久美子、峯田周幸 : 特発性血小板減少性紫斑病(ITP)を合併した妊婦の外傷性舌血腫例. 耳鼻臨床 104(11): 803-807, 2011.
7. 三澤由幾、荒井真木、加藤照幸、細川久美子、三澤清、峯田周幸 : 外耳道に進展した小児咽後膿瘍の一例. 小児耳 32(3): 401-404, 2011

インパクトファクターの小計 [0.00]

4 特許等の出願状況

	平成 23 年度
特許取得数（出願中含む）	0 件

5 医学研究費取得状況

	平成 23 年度
(1) 文部科学省科学研究費	4 件 (540 万円)
(2) 厚生労働科学研究費	1 件 (50 万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0 件 (0 万円)
(4) 財団助成金	0 件 (0 万円)
(5) 受託研究または共同研究	0 件 (0 万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	8 件 (337.5 万円)

(1) 文部科学省科学研究費

中西 啓（代表者）若手研究 (B) 毛根 cDNA を用いたアッシャー症候群・難聴の簡易精密遺伝子診断法の確立 110 万円（継続）

高橋吾郎（代表者）若手研究 (B) スギ花粉症患者に対する医師の薬剤処方パターンに関する研究 120 万円（継続）

杉山健一（代表者）若手研究 (B) メニエール病(内リンパ水腫)の質量分析イメージングを用いた解析 120 万円（新規）

三澤 清（代表者）、峯田周幸（分担者）基盤研究(C) 頭頸部癌における癌幹細胞の役割と新規治療法の探索 190 万円（新規）

(2) 厚生労働科学研究費

中西 啓（分担者）難治性疾患克服研究事業、アッシャー症候群に関する調査研究 50 万円（新規）
代表者 信州大学 宇佐美真一

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件	0 件
(2) シンポジウム発表数	0 件	0 件
(3) 学会座長回数	0 件	8 件
(4) 学会開催回数	0 件	0 件
(5) 学会役員等回数	0 件	13 件
(6) 一般演題発表数	2 件	

(1) 国際学会等開催・参加

5) 一般発表

ポスター発表

1. Takahashi G, Mineta H, Masuyama K. : A comparison of regular and as-needed use of Mometasone

furoate hydrate nasal spray in the treatment of Japanese cedar pollinosis. 14th International Rhinology Society / 30th International Symposium on Infection and Allergy of the Nose ANA Intercontinental Tokyo Tokyo, Japan September 20 - 23, 2011.

2. Misawa K, Kanazawa T, Misawa Y, Imai A, Mineta H.: Frequent promoter hypermethylation of tumor-related genes in head and neck squamous cell carcinoma. The 11th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery, Kobe , December 8-9,2011.

(2) 国内学会の開催・参加

4) 座長をした学会名

- 峯田周幸 第 112 回日本耳鼻咽喉科学会
 峯田周幸 第 35 回日本頭頸部癌学会
 峯田周幸 第 73 回日本耳鼻咽喉科臨床学会
 峯田周幸 第 20 回日本頭頸部外科学会
 峯田周幸 第 59 回中部地方部会連合会
 峯田周幸 第 21 回日本耳科学会
 水田邦博 第 112 回日本耳鼻咽喉科学会総会
 水田邦博 第 21 回日本耳科学会

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

- 峯田周幸 日本耳鼻咽喉科学会静岡県地方部会長
 峯田周幸 日本耳鼻咽喉科学会評議員
 峯田周幸 日本頭頸部学癌学会評議員
 峯田周幸 日本口腔咽頭学会評議員
 峯田周幸 日本鼻科学会評議員
 峯田周幸 日本喉頭科学会評議員
 峯田周幸 日本頭頸部外科学会理事
 峯田周幸 日本気管食道学会評議員
 峯田周幸 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会評議員
 峯田周幸 日本耳鼻咽喉科感染症研究会評議員
 峯田周幸 耳鼻咽喉科臨床学会評議員
 峯田周幸 日本小児耳鼻咽喉科学会理事
 水田邦博 日本耳鼻咽喉科学会評議員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数 (レフリー数は除く)	2 件	0 件

(1) 国内の英文雑誌の編集

Auris Nasus Larynx (Editorial Board)

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

4回、 Auris Nasus Larynx (Japan)

9 共同研究の実施状況

	平成 23 年度
(1) 国際共同研究	0 件
(2) 国内共同研究	0 件
(3) 学内共同研究	0 件

10 産学共同研究

	平成 23 年度
産学共同研究	0 件

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. ヒト乳頭腫ウイルスに (HPV) による頭頸部癌発癌の分子メカニズムの解明について

頭頸部癌はヒト乳頭腫ウイルスに (HPV) による感染と因果関係が深い、といわれている。我々は臨床検体から中咽頭 (特に扁桃) 癌と極めて密接に関係していることを報告した。そして HPV タイプ 16 が多く癌組織に発現していた。HPV が頭頸部組織に感染し、早期遺伝子 E2 がプロモーター領域で切断され、環状ウイルスが線状ウイルスに変化する。E2 遺伝子による E6 および E7 遺伝子への抑制がとれる。そして E6 および E7 遺伝子が過剰発現することによって E6 遺伝子産物は p53 遺伝子に、E7 遺伝子産物は Rb 遺伝子に結合して、それぞれの腫瘍抑制遺伝子を不活化する。これが HPV による発癌メカニズムの一つと考えられている。そこで頭頸部癌の培養細胞に野生型 E2 遺伝子を導入することによって、癌細胞の消退あるいは増殖能低下を確認できるか検討した。現在、野生型 E2 遺伝子を遺伝子導入をおこなっている。今後アポトーシスの程度を確認する予定でいる。

また、もう一つの実験系では、E6 および E7 遺伝子を RNA 干渉を用いて頭頸部癌細胞の発育程度を調べている。臨床ではおおよそ 20% の頭頸部癌細胞から HPV が検出されているが、p53 遺伝子の発現異常とは相関はなく、PTEN (phosphatase and tensin homolog) 遺伝子の不活化と密接な関係があり、学会報告した。

(峯田周幸、細川誠二、三澤 清)

2. めまい患者における自律神経機能の臨床的研究

本研究は、自律神経機能障害が原因と考えられる症例に対して、心電図 R-R 間隔の周波数スペクトル成分による変動係数、自発脳波 (EEG)、加速度脈波 (SDPTG)、脈波伝播速度 (PWV)、血圧を用いて、安静時 (臥位)、安静時 (臥位) から立位後の経時的な変動ならびに安静時 (臥位) から頭下位後の経時的な変動、および起立・頭下位負荷時の自律神経機能を測定し、めまいの発症にどのように関わっているのかを調べることを目的とした。

自律神経機能障害を伴っていると考えられるめまい症例に、安静時(臥位)、安静時(臥位)から立位後の経時的な変動ならびに安静時(臥位)から頭下位後の経時的な変動、および起立・頭下位負荷時の自律神経機能を測定することで、健常者で得られた自律神経機能の結果と比較することで自律神経機能がめまいの発症にどのように関わっているのかを検討した。

(峯田周幸、三澤 清)

3. 耳管開放症の研究

耳管開放症の症例をまとめ、西遠 ENT 研究会 2011 年 5 月、浜松尾張耳鼻咽喉科医会冬季研修会 2012 年 3 月、名古屋の 2 講演を行った。今後も適切な診断・治療を目指す。

(水田邦博、大和谷崇、瀧澤義徳、細川久美子、中西 啓)

4. 質量顕微鏡による内耳の分析

蝸牛を質量顕微鏡により解析し日本耳科学会で発表した。今後も継続しさまざまな病態での解析を行う。

(水田邦博、瀧澤義徳、杉山健一、中西 啓、泉智沙子)

5. 真珠腫性中耳炎の手術的治療

耳管機能を詳細に検討し耳管機能に見合った手術を行い、成績の向上を目指した。

(水田邦博、大和谷崇、瀧澤義徳、細川久美子、中西 啓)

6. レセプトデータにおけるアレルギー性鼻炎患者の受療動向

約 100 万人の診療報酬明細書で構成されるデータベースを利用し、レセプト上での春季アレルギー性鼻炎の定義を定め、2005～2011 年のデータを対象に解析を行った。15 歳未満の小児の受診割合は、13.4～26.9%で、15 歳以上の成人では、5.8～10.7%であった。シーズン中に処方される薬剤については、第 2 世代抗ヒスタミン薬単剤という患者割合はやや減少し、同剤に、鼻噴霧用ステロイド薬、抗ロイコトリエン薬を合わせた 2 剤、3 剤が処方される患者の割合が増加する傾向を示していた。

(高橋吾郎)

7. 本邦におけるアッシャー症候群患者の遺伝子解析

アッシャー症候群 (USH) は、感音難聴に網膜色素変性症を合併する常染色体劣性遺伝性疾患である。難聴に視覚障害を合併する疾患は約 40 種類知られているが、本疾患は全患者数の約半数を占める最多の疾患である。欧米では USH の遺伝子解析が進んでいるが、本邦では遺伝子解析があまり行われておらず、日本人における変異スペクトラムについてはほとんど検討されていない。

本年度は 5 人の USH タイプ 1 患者を対象として *MYO7A*、*CDH23* の遺伝子解析を行い、4 人の患者において 5 種の疾患原因と考えられる変異を同定した。5 種の変異の中で、*MYO7A* の 1 種 (p.Ala771Ser)、*CDH23* の 1 種 (p.Tyr1942SerfsX23) は現在までに報告されていない新規の変異であった。p.Tyr1942SerfsX23 は、エキソン 44～46 を含む 5078 塩基が欠失する巨大欠失変異であったが、*CDH23* においてはこのような巨大欠失変異の報告はなく本変異が初めてであった。

(中西 啓)